B-30-1

音楽月

華麗、豊かな情感

ルービンシュタイン独奏会

三十一年ぶりに来日したアルトゥール・ルービンシュタインはやがて八十才になる小柄な老人で、上品なご隠居さんという印象を受ける。「ピアノの帝王」といわれるようないかめしさはどこからも感じられないが、端正な姿でピアノに向かうと、なかなかに若若しく華麗で情感豊かな音楽の世界をくりひろげる。

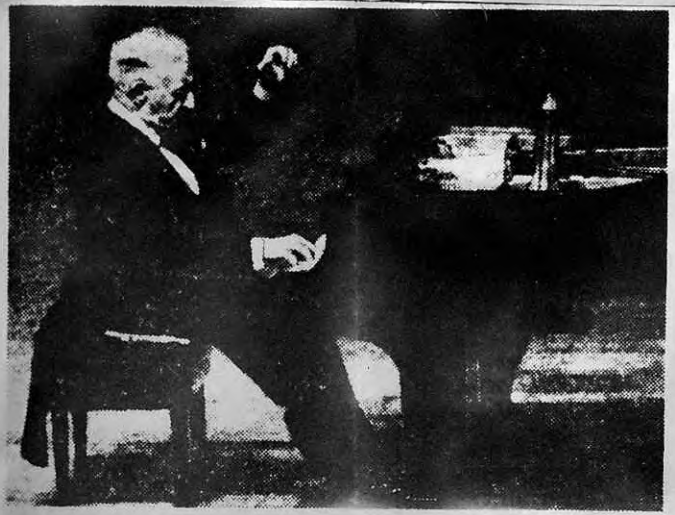
彼の演奏にはむずかしい芸術と対決しようとする「かまえ」や「気負い」はまったくない。こく自然な日常の行為としてこの老匠はピアノを楽しんでおり、自己のペースに聴衆をひきいれてしまう。ベートーベンでもショパンでも、彼の手にかかると、ピアノという楽器を演奏するのは、なんとたやすいことであろうと思われてくる。七十年という豊富な演奏経験をしのばせる名人芸の極致といってよいだろう。

ルービンシュタインのピアノは旋律の歌わせ方や、テンポの微妙な設定に独特のうま味があり、またペダルの使用も多い。それらがツボにはまってすばらしい効果を発揮することはしばしばだ。ときに最盛期にはもっと効果的だったろうとさえ思われるが、それは老いの衰えを現実に感じるというのではなく、聞き手の勝手な推理なのである。ともかく現代のピアノ界が見失ってしまいそうなロマンの香りが彼のピアノにはただよい、一時代前のピアノの可能性をきわめつくした人といえる。

そんな彼だから厳格な造型を重んじる曲よりも、即興ふうの小品の方により音楽が生きている。得意のショパンでも「ソナタ」より「ノクターン」が名演だったし、京都でやったシューマンの「謝肉祭」も型通りにうまくまとまったすばらしい音楽だった。「熱情ソナタ」は若いベートーベンの心の告白というよりは老人のはなやかな青春回想にかたむき甘美に流れすぎた。作曲者がピアノの可能性を越えたことをピアノに要求した音楽は、この巨匠にとってあまり向いていないようである。

（渡辺記者）

■21日京都会館、23日大阪フェスティバルホール、25日は協奏曲の夕。



演奏するルービンシュタイン（フェスティバルホールで）

41.6.24 毎日（大阪）夕刊